

102 戒藏天下首都大激
貫徹玄更

全市大の学友諸君！ 10・21開催は
今秋期安保政治決戦の突破口とし
て全日本各地で激闘に燃え激闘をくづ
あげた。

眞に諱を取る事無く、帝は「主義内閣打卦」の政治主張を、
終評、社説とは自立した我々の開い
として、確定にその歩を進むやうモメ
ントを造り立したのである。

しかし同時に我々は、田舎根柢と資本のあらかる暴力装置及び体制を確立した市民社会の構成員として、内安定装置（民同）終焉マスコミを絶却に迄至った彈圧体制の下で、我々の志向したかかる方向性が完全には貫徹しなかったことをもう一度確認せねばならぬ。が問題なのは何故支配者側の入念王手を許したことである。

に自己区別し、直接的な大皿斗争が起る。エストラの形成によつて、佐野訪未阻止→帝室主内閣打撃に向け進撃を開始してしまつた。かかる状況にあり、一方に於て社長一日が死んだ。美子は、4・路10万人から14・24万人と、組合員たゞひとり動員をもつてさえ、その懲罰を消滅過程をバクロせざるをえない。

我々は反戦派労働者、战斗の大衆の権力を効かすものとして、今後はならない。」

その中から、初めに、佐野訪未を阻止しようとしたところ、佐野が訪米したところをより深刻な政治危機をよびおこすようである。

この様な基盤がなければ、何事も成らぬ。この斗争の勝利的展望も出ないのであらう。
まさに今や部分的な一つや二つが斗争の敗北は肉體ではない。日々増々の経済的困窮者・人民が戦ひのまわりに出現しつつあるこそ最も重要な事なるに、
佐藤詩未阻止一帝は主義内閣打合の一つのものと市民社会の全ゆゑを部分から、若く

早すぎるとか、取扱が困難であるから、街頭で反乱をつくるといふ。日和見主義にあどしまれてはならない。今、我々に向われて、あはしきことはない。帝曰主義者が手をゆるめることを待つこと、これは断じてない。10・21のあの徹底した弾圧では

市大に於る我々の斗争の現在的状況因体は、
之に對する本のト拉斯以降支配者の手で、
現行手がかりの市大斗争も位置付けねば
ならない。

しを許す中で、立法の目録が「発行」を背景に中央集権化され、上ノ層底的に官僚化され、学内執行部体制との間にあらざる事を明確取り立てる必要がある。たゞえば、全學的に入協議会は実質機能せず、人渡瀬一郎（同上）

今後ヨリ臨時執行部と執行してある。
その意味において統一團交要求でこれが
至る處に於くする用は一定の意義は
ある。しかしそれだけでは足りて不十分
である。その公開解体を要求しながう

毛利を捕獲せし、伊賀をクレスの巣に
之トあるは、战斗的学友による中枢林
の占拠、ペリケード封鎖等の戦術で支え
更に学部的な直接的大衆開拓林園の確
立実現し(例えはスト宾・安藤周也)セレブ

まことにその甘利連合の本筋は、中から政治闘争との結合を目的意識的追求せねばならない。

この様な基盤がないかぎり、純一團支宣の斗争が勝利的展望を出ないであらず、まさに今や部分的な一つや二つも闘争

敗北は肉魁ではない。日々増々徳
帝は主义内閣打仆を確信しつつあると
勞労者、人民が我のまわりに出現しつつあ
るこそ最も重要な事なれば。